

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の児童生徒のスクールモラルについての検討：
地域差、学年差及び性差を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東江, 康治, 石川, 清治, 嘉数, 朝子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1872

沖縄の児童生徒のスクールモラルについての検討

—地域差、学年差及び性差を中心に—

東江康治* 石川清治** 嘉数朝子*

A study on School Morale Test (SMT) scores of school children in Okinawa — comparisons between schools, grades, and sexes.

Yasuharu AGARIE, Kiyoharu ISHIKAWA, Tomoko KAKAZU

(Received July 10, 1981)

はじめに

児童・生徒の人間形成には多くの要因が関与していることはいうまでもない事実である。たとえば、その直接的環境である家庭、なかでも保護者はもっとも強い影響を及ぼしている。しかし、児童・生徒が一日の大半を過す学級、そこでのダイナミックな教師との人間関係、さらに級友との関係のあり方は児童生徒の人間形成に多くのインパクトを及ぼすばかりでなく、学習への意欲、帰属意識などに対しても強い影響を与える。

大西ら(1967)は児童生徒の学級におけるあり方を心理的安定、さらには学校生活に積極的にとりくもうとする意欲などを総称した「スクールモラル」という概念として導入し、児童生徒を正しく理解するためにSMT=School Moral Test(学級適応診断検査)を作成した。そしてこのテストを用いた多くの教育心理学的研究が報告されてきている。例えば、児童・生徒の学級間の差異(松山・倉智, 1969)、自己概念とスクールモラルの関係(松山ら, 1976)、スクールモラルの変動要因及び変動群と安定群の特性(倉智, 1979)、スクールモラルと学業成績の関係の検討(西山, 1972)、児童・生徒のリーダーシップ機能とスクールモラルの関連性の検討(市河, 1973)などがそれである。なかでも西山(1972, 1973)は児童・生徒のスクールモラルを学級グループダイナミックス、知能、学業成績など関連づけて意欲的な研究を報告している。

ところで、本研究の目的は沖縄県の児童生徒のスクールモラルを県内2地域の児童生徒を対象に、(1)スクールモラルの地域差、(2)スクールモラルの発達の変化、(3)スクールモラルの性差を検討することであ

る。上記2地域の児童生徒についてはスクールモラルテストのほか学力、知能及び言語生活、さらには達成動機などについて既に資料が収集されているが、本稿ではスクールモラルについてのみ報告することにした。

方 法

1. 調査対象

調査の対象となった児童生徒は沖縄県の2地域の小学校5年生、中学校1年生及び中学校3年生の合計473人である(表1)。地域Aは沖縄北部の小学校と中学校、地

表1 サンプル構成

地域	学年 性別	小 5		中 1		中 3	
		M	F	M	F	M	F
地 域	A	27	50	38	46	48	34
	B	36	38	39	36	48	39
	計	63	88	77	82	96	73

域Bは同南部の小学校及び中学校である。それぞれの小学校と中学校は同地域にあり、小学校の卒業生はその地域のそれぞれの中学校に進学している。

2. 調査内容及び調査時期

(1) スクールモラルテスト(SMT)

2地域のそれぞれの学年の児童生徒に1学期(1980年6月~7月)に「SMT学級適応性診断検査(学級モラルテスト)」「(EIS学校モラル研究会編 1967 日本文化科学社)をそれぞれの学年の学級で実施した。テス

* 琉球大学教育学部心理学教室

** 琉球大学教育学部幼児教育研究室

トはそれぞれ15項目からなる5つの下位テストから構成されている。以下に下位検査の名称と主な内容を示した。

- (I) 学校への関心……学校との一体感、学校全体に対する感情など。
- (II) 級友との関係……学級集団の中での友人関係における満足度。
- (III) 学習への意欲……学業における成功感、学業に対する興味や関心。
- (IV) 教師への態度……先生との間の人間関係における満足度。
- (V) テストの適応……テストに対する意識、とくにテストに対する不安感からくる構え。

ところで、テストの採点については、電算機処理の都合で次の通り行った。すなわち、テスト作成者らは「望ましい回答」には1点、「望ましくない回答」には-1点、「どちらともいえない(?)」には0点(得点を与えない)としているのに対し、「望ましい回答」に2点、「どちらともいえない(?)」に1点、「望ましくない回答」には0点として点数を与えない方法をとった。

結果と考察

スクール モラル テスト (SMT) の平均値、標準偏差を地域×学年×性によって示したのが表2である。

Fig 1～5は下位テスト毎に学年と性によって示したものである。表はスクール モラル テスト (SMT) を下

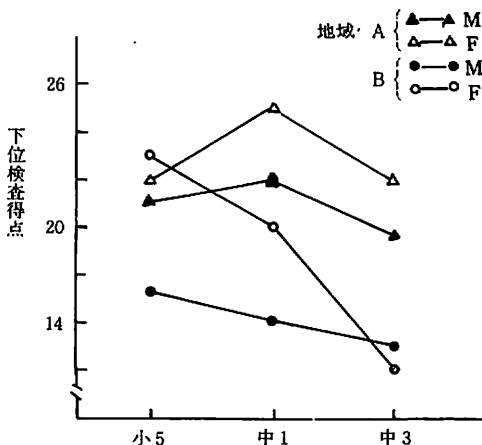


Fig. 1 SMT-I (学校への関心)得点の地域別、性別比較

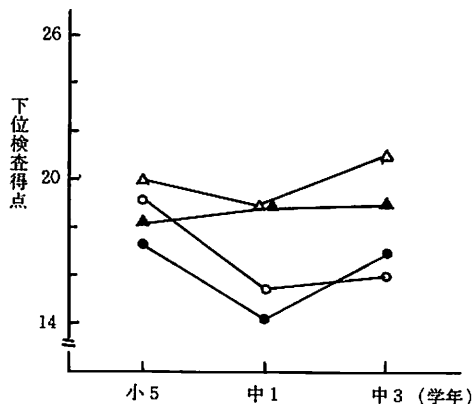


Fig. 2 SMT-II (級友との関係)得点の地域別、性別比較

表2 SMT 下位テストの \bar{X} とSD (学年×地域×性)

下位 テスト	性別	5 年				中 1				中 3			
		A		B		A		B		A		B	
		M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
S	1	21.13 (5.33)	22.28 (5.97)	17.92 (6.18)	23.54 (4.90)	22.57 (5.06)	25.84 (4.20)	16.74 (5.68)	20.68 (6.57)	19.80 (5.71)	22.03 (5.70)	15.62 (6.63)	14.41 (7.46)
	2	18.58 (4.53)	20.04 (5.25)	17.79 (4.17)	19.54 (4.19)	19.29 (4.20)	19.40 (4.75)	14.37 (3.31)	15.81 (4.88)	19.22 (5.03)	21.23 (5.31)	17.62 (4.79)	16.93 (4.86)
M	3	18.87 (4.86)	19.45 (5.78)	16.33 (4.26)	19.68 (4.33)	20.32 (5.58)	22.86 (5.01)	14.23 (6.26)	18.55 (4.79)	17.82 (5.18)	18.21 (5.57)	16.23 (5.28)	15.83 (5.71)
	4	19.84 (4.65)	19.61 (4.64)	16.15 (6.00)	16.77 (5.72)	19.16 (6.51)	20.00 (5.57)	17.45 (3.56)	19.55 (5.28)	15.08 (5.13)	16.20 (5.60)	12.38 (6.09)	9.72 (6.01)
T	5	14.52 (5.16)	13.23 (4.69)	15.31 (6.75)	15.43 (5.22)	15.37 (5.26)	15.88 (4.07)	16.00 (4.20)	17.36 (5.35)	13.61 (4.13)	12.03 (4.75)	14.40 (4.61)	11.14 (5.47)

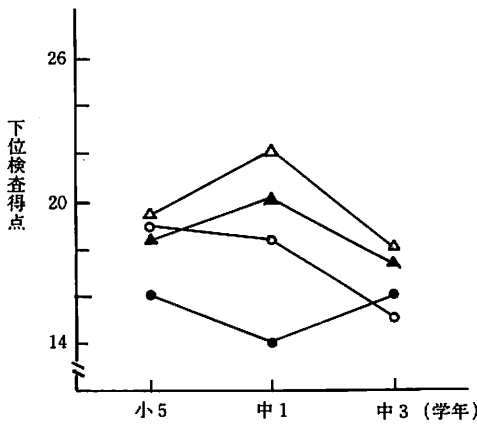


Fig. 3 SMT-Ⅲ(学習への意欲)得点の地域別、性別比較

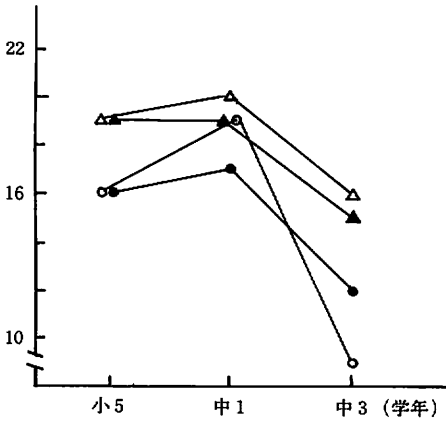


Fig. 4 SMT-Ⅳ(教師への態度)得点の地域別、性別比較

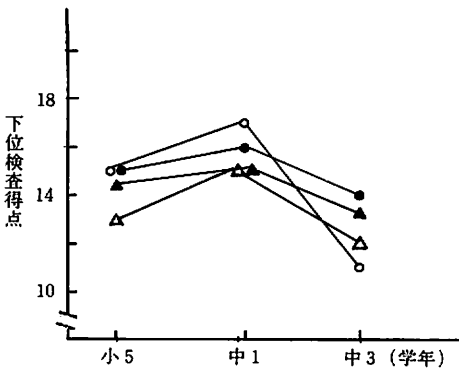


Fig. 5 SMT-Ⅴ(テストへの適応)得点の地域別、性別比較

位検査毎に地域(2)×学年(3)×性(2)による分散分析(Anova)を行なった結果の概括表である。以下にスクールモラルテスト(SMT)の下位検査別に地域差、学年差、及び性差の主効果を交互作用について検討することにする。

表3 分散分析概括表

	主 効 果			交 互 作 用	
	性(A)	学年(B)	地域(C)	A×B	B×C
1	**	***	***	*	
S 2		**	***		
M 3	**	**	***	**	**
T 4		***	***		**
5		***		*	

* P < .05
 ** P < .01
 *** P < .001

(イ) 地域差について：表2及びFig1～5から明らかになるように、いずれの下位テストにおいてもA地域がB地域に較べて高い得点を示している。しかし下位テスト5(テストへの適応)はその差は有意ではない。その他の下位テスト、学校への関心、級友との関係、学習への意欲、教師への態度はともに地域差が顕著(P < .001)である。

(ロ) 学年差について：同じく表2及びFig1～5が示すように、下位テストの得点は著しい相異が見られる。学年別に下位テストの得点をみると「級友との関係(下位テストII)」が低いのを除けば、いずれの下位テストでも中学校1年生が高い得点を示している。これはテスト実施時期が1学期であったことによるものであろう。いっぽう、中学3年生ではこの下位テスト(級友との関係)がもっとも高い得点を示すのに対して、他の下位テストはいずれも低い得点となり、なかでも「テストへの適応(下位テストV)」、「教師への態度(下位テストIV)」、「学校への関心」の順に低くなっている。学年間における得点差は下位テストII及びIIIは有意差がP < .01であるのに対して下位テストI、IV、VはP < .001をもって有意である。

(ハ) 性差について：いずれの下位テストも男子に較べて女子が高い得点を示しているが、その差は特に「学校への関心(下位テストI)」、「学習への意欲(下位テストIII)」において有意(P < .01)であった。

つぎに交互作用についてのべることにする。表3に示すように3次元(地域×学年×性)の交互作用は認められなかった。2次元の交互作用については学年(B)×性(A)に3つの交互作用が、学年(B)×地域(C)については2つの交互作用が認められた。すなわち、学年(B)×性(A)の交互作用では「学習への意欲(下位テストIII)」に $P < .01$ 、「学校への関心(下位テストI)」、「テストへの適応(下位テストV)」にそれぞれ $P < .05$ の有意差が認められた。学年(B)×地域(C)では「学習への意欲(下位テストIII)」、「教師への態度(下位テストV)」に有意差($P < .01$)が認められた。これらの結果は学年と性別によってスクールモラルの下位テスト領域に相異があること、同じく学年と地域によっても下位テスト領域のいくつかは同じではないことを示すものである。

表4 SMT 下位テスト間相関

		S M T			
		2	3	4	5
S M T	1	.647*** .459*** .579***	.776*** .607*** .615***	.605*** .468*** .588***	.258*** .055*** .176***
	2		.604*** .354*** .425***	.499*** .296*** .365***	.264*** .120*** .100***
	3			.589*** .502*** .466***	.436*** .194*** .324***
	4				.391*** .126*** .251***

* $P < .05$ 上段 小5
 ** $P < .01$ 中段 中1
 *** $P < .001$ 下段 中3

表4は地域と性をこみにした学年別のスクールモラルテストの下位テスト間の相関表である。ちなみに上段は小学校5年生、中段は中学校1年生、そして下段は中学校3年生の相関値である。まず、小学校5年生はいずれの下位テストも相関は有意($P < .001$)である。中学校1年生では「学校への関心(下位テストI)」は下位テストII、III、IV(級友との関係、学習への意欲、教師との関係)は有意($P < .001$)であるが「テストへの適応(下位テストV)」との相関は有意ではない。同じく

「級友との関係(下位テストII)」及び「教師との関係(下位テストVI)」と「テストへの適応(下位テストV)」は有意ではない。中学校3年生では「級友との関係(下位テストII)」と「テストへの適応(下位テストV)」だけは有意でないが、その他の下位テストの相関はすべて有意である。以上は地域と性をこみにした学年別の相関値の結果であるが、地域別に相関値を算出していただければ2地域の児童生徒の特徴がもっと明確になったのではないかと考えられる。今後における学力と関連づけた分析ではこの点に配慮すべきであろう。

ま と め

以上に沖縄県の2地域の小学校及び中学校の3学年の児童生徒に実施したスクールモラルテスト(SMT)の結果について述べてきたが、その結果はほぼつぎのようにまとめることができるように思われる。

1. 児童生徒のスクールモラルは地域差がある。沖縄県内の2地域の小学校と中学校の児童生徒を対象としたので“地域”としてあるが、これはスクールモラルの“学校差”と呼んでもよいものであろう。
2. 児童生徒のスクールモラルには学年差がある。ここでは調査時点が1学期であったという事を考慮しなければならないが、中学校1年生では「級友との関係(下位テストII)」を例外とすれば他の学年に較べて他の学年よりも高い得点をいずれの下位テストでも示していた。これは新しく中学生になった事による期待すなわちモラルの高さを示すものであろう。これに対して中学校3年生ではいずれの下位テストも他の学年に較べて低く、なかでも「学習への意欲」、「教師への適応」「テストへの適応」が特に低い得点を示した。
3. 児童生徒のスクールモラルには性差がある。上記の地域差と学年差ほどではないが、「学校への関心」「学習への意欲」の下位テストにこれが著しい。すなわち女兒に較べて男児はこの下位テストにおいて低い。このことは男児は女兒に対してこの2領域において低いモラルにあるといえよう。

註 本研究に必要な統計解析は九州大学大型計算機センター(課題No. 1204)において行なった。

参 考 文 献

倉智佐一 1979 スクールモラルの変動に関する測定的研究 心理測定ジャーナル 15, 19-24
 大西佐一ほか SMT (学級適応診断検査手31 1967

日本文化科学社

- 松山安雄，倉智佐一 1969 学級におけるスクール モラールに関する研究(1) 大阪教育大学紀要 18, 19-36
- 松山安雄，倉智佐一，西山鴻 1976 学級におけるスクール モラールに関する研究(2) 大阪教育大学紀要 25, 93-103
- 西山鴻 1972 スクール モラールと学業成績 教育心理 20, 49-52
- 市川淳章 1973 児童のスクール モラールに関する研究 広島大学教育学部紀要（第一部）22, 223-231
- 西山啓 1972 スクール モラールに関する研究 広島大学教育学部紀要（第一部）21, 253-265
- 西山啓 1973 スクール モラールに関する研究 広島大学学業育学部紀要（第1部）22, 309-319